

---

# 浮浪の聖職者

著作権

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浮浪の聖職者

### 【Nコード】

N9814Z

### 【作者名】

著作権

### 【あらすじ】

これは前作【双銃の殲滅者】のリニューアル作品です。主人公は変わっております。

この作品は作者の妄想によって形づくられています。なので、こういうの無理！という方はお勧めしません。

さらに妄想によって形づくられているということは更新ペースが亀なのでご了承下さい。

それでもいいかたは駄文ですがごゆるりとお楽しみください。

## 始動【シドウ】（前書き）

にじファンよ、私は戻ってきた！

．．．．ハイ、スイマセン調子乗りました。

いやー、意外にも復活が早くてスイマセン。

またどーしても二次小説が書きたくなってしまうのがなくなりました。

駄文ですがごゆるりとお楽しみください。

## 始動【シドウ】

辺りは何故か禍々しいと感じる機械に埋め尽くされていた。それは一つ一つに気色悪い装飾がなされている。いや、装飾ではない、もともとの形でそれは普通の物体ではなかった。

辺りの機械の中で1つの物体がギギツと耳障りな音をたてながら首に当たるものだろう部位を回転させる。

「キ、キハハハ！バカな！このオレ様がエクソシストでもないテーマみたいな小僧に負けるはずがない！」

「……………」

無言を貫くのは黒に近い藍色の髪を持つフードをかぶった少年。少年は僅かに見えている目を隠すように深くフードをかぶる。

「なんなんだよオ！テーマはよお！」

「……………」

機械に答えを求められるがそれでも無言を貫く少年。辺りにいる機械たちがさつきまで話していた機械を元に次々と覚醒する。

「ミナゴロシ！ミナゴロシ！ミナゴロシ！」

「コロセ！コロセ！コロセ！コロセ！コロセ！」

「……………笑止……………」

少年はそう言つと足首まで伸びているコートの懐から一丁の拳銃を取り出す。

機械たちはそれを見て、言葉に焦りが出る。

「ッ！やっぱりエクソシストかああ！」

「・・・・・・・・・・否・・・・・・・・」

機械たちは一斉に咆哮すると一点に集まる。辺り一面の機械たちが一点に集まる様は圧巻であった。しかし少年は動じない。少年は懐からもう一丁の拳銃を取り出す。二丁の拳銃を構えるとその銃口が機械たちにとっては厄災の火花を噴かす。

しかし機械たちもただやられるだけではなかった。

「悪星ギターー。」

巨大な人型になった機械の後ろに五芒星が浮かぶ。そこから巨大なエネルギーの奔流が流れ出す。

「疾ッ！」

少年は常人ではあり得ないほどの跳躍力で機械の顔の前に接近し、自らの得物を放つ。

「……………他愛ない。……………」

少年は呟いて、あの場所から遠く離れていた。

「これは……………」

そう呟いてしまったのも当然だと言える。目の前には巨大な機械

A K U M A が無惨にも壊されていた。

「師匠！コレって……………」

「ああ、コリヤ A K U M A だ。けど爆発音がしたのはいいが、肝心の同業者が居ねえな？」

話しているのは浮浪者風の服装をした白髪の少年と金のコートを着ている赤髪の男。

「どづいづことですか師匠？」

「ああ？なんで俺がそんなことしなきゃならん？」

「じゃあ、いいです。」

白髪の少年は、はああ・・・とため息をつき目の前のAKUMAを見据える。

「.....」

「.....」

「.....」

「わかりません師匠。」

「.....」

「師匠？」

白髪の少年は自分の恩人でもある目の前の男を訝しげに見る。

「ZZZZZZZ.....ZZZZZZZZ.....」

「.....シネ。」

少年は再度ため息をつき空を見上げる。空にはもうすぐ夜が明け  
るのだから白みがかっていた。



## 怪しい雲行き（前書き）

明けましておめでとういいます。

最近になってやっとこと慣れてきた作者です。駄作者ですが。

一話目、さしず

## 怪しい雲行き

周りはたくさんの人々に溢れていて今すぐにも人々の流れに巻き込まれそうな喧騒だった。

しかし、その中でも流れに巻き込まれずたたずんでいる少年がいた。少年は足首まで伸びているコートをはおり、フードを目深に被っている。

「……………変……………」

少年は周りに聞こえない声でそう呟いた。少年が変と感じたのは人々にはない。それは常人では感じられない時間の流れ。

「……………出られない……………」

あの巨大な機械との戦闘を行ったあと、早々に立ち去って面倒なエクソシストに接触しないようにしたのだが、しばらくぶりに長期の休憩を取ろうと町に寄ったのが運の尽きだった。

「イノセンス？……………」

それは神の結晶。機械　AKUMA　を唯一撃破できる手段。  
それを用いてAKUMA　を倒す者をエクソシストといった。

「……………迂闊……………」

少年がイノセンスの存在に気付いたのはたまたまであった。

長期の休憩なのだから滞在中AKUMA　に襲われないために町を

監視しようとしばらく町を眺めていると深夜12時に異変が起こった。

寝静まった町のありとあらゆる物、建物、地面、寝ていた馬からも時計の針のようなものが出ていき、出ていったものは不自然な形で止まる。そして次の瞬間にはもとに戻っていた。

最初はなんだ？ぐらいにしか思っていなかったが、それが1ヶ月も続いていると不審に思ってきた。しかし町の人々はなにも気づかないようだった。そしてイノセンスの存在に気がついた。だが例え気づいたとしてもどうするつもりもなかった。

しかし、ここで問題が発生した。

出られないのだ。

そう出られない。町の外に出ようとしても外の出た瞬間町の中に戻っていた。コレもイノセンスの仕業か、と頭を悩ませているといつの間にか夜になっていた。

仕方ない宿に戻るか、と路地裏に降りてきたとき近くから戦闘音が聞こえてきた。

戦闘音はすぐ近くの路地裏からだった。

「……………触らぬ神には祟りなし……………」

少年は行きかけていた足を百八十度回転させると宿の方に向ける。

向けた瞬間、何かにぶつかった。

「ヒ、ヒイイイイツ！ゴ、ゴメンナサイイイ」

ぶつかった女性は悲鳴を上げると足早に駆けていった。

「な、何？……」

少年は珍しく声を荒げると体勢を崩した体を戻そうとする。そこに焦った声がぶつかった。

「あつ！ちよつと！」

「クツ！……ととつ！」

体勢を直そうとしたところに新たな人がぶつかってきてまた体勢を崩す。

少年はぶつかったコートを着た男を睨む。

「……何用……」

「あつと！ゴ、ごめん。」

「じゃ！……待ってくださいーい！」

嵐のように来て去っていったさっきの男達を考え嘆息するとさっきの男達が来た方向を見ると機械の残骸が放置されていた。

「……AKUMA……」

AKUMA は既に機能を停止してただの機械と化していた。少年は先程ぶつかった男が去っていった方向をみつめ、呟く。

「……………面倒……………」

わざわざエクソシストと接触しないように行動していたのにこの数カ月でこの町の異変に気づき、エクソシスト達が派遣されたのだろ。しかし、こちらとしては都合が悪い。まさか何カ月もこの町に縛られると思っていなかった。

「……………仕様がない……………」

少年は溜め息を吐くと宿に戻ろうと足を宿に向ける。

「……………どうする？……………」

宿に戻った少年は今後のことを考える。

エクソシスト達が来た以上早々に立ち去るべきだ。だが町から出られなければどうしようもない。

考えた先から行き詰まってしまうこの悩ましい事態に頭が痛い。取り敢えずAKUMAに襲われないよう監視は続けるべきかと一応の結論をつけ、コートを脱ぐ。

脱いだコートを投げ捨てベッドにダイブする。ベッドは安い宿を選んだため多少固めだが長い間過ごしたので既に慣れた。

「……………」

ベッドの上でくつろぎ始めるとまた問題点を考える。だが先ほども解決策が思いつかなかった為やはり何も思いつかない。

ゴロゴロとベッドの上で頭を抱え、あーでもないこーでもないと思案するなか、またもや物という物から時計の針のようなものが出ていく。それをポーツと見ているとあることに気付く。

それはある方向に向かっていった。慌てて窓際に近づきどこに向かっていているか確認する。

「……………あれは……………」

時計の針のようなものはとある一軒の家に向かっていき家がそれを吸いとっていく。初めて気づいた事実には驚愕すると共にある考えが閃く。

(……………けど、バレたときのリスクが大きい……………)

失敗したときのことを考え、またもや悩み始める少年。しかし数分熟考すると覚悟を決める。

「……………仕様がないな……………」

懐から二丁に拳銃を取り出す。それは黒を基調とした色で金色のラインが施されていて、豪華な装飾とゆうよりはシンプルな飾りの

拳銃。

「……………いざとなったらこれに頼る。」

その時、吸収が終わり朝を迎えるのか空は白み始めていた。そんな空を見つめ呟く。

「失敗したら、地獄行き覚悟。」

鳥のさえずりが妙にハッキリと聞こえる朝であった。

## 怪しい雲行き（後書き）

感想を頂けると作者の更新もスムーズに進む・・・かもしれないです。よろしく願います。（おい

ご指摘も頂けると幸いです。

まだまだ未熟者ですが、頑張るので応援していただければ幸いです。

感想の制限は外しておくのでユーザーではない方もご意見を頂けるとありがたいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9814z/>

---

浮浪の聖職者

2012年1月2日00時46分発行